



9月

Sep. | 2024
沖縄開教本部通信
vol. 113

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

真宗禁制下の琉球において、ジュリたち門徒は、仲尾次政隆や備瀬知恒など在家の指導者の説教を聴聞したり、本尊を礼拝したりすることで、長らく信仰を維持してきました。そのような中、東本願寺派遣の僧侶が一八七六年に来琉し、備瀬等と同様に布教の拠点を辻に置きます。第三回目である今回は、布教僧のひとり清原競秀が記した『日々琉行之記』（注1）から、ジュリと僧侶たちの日々の真宗信仰について見ていきます。

辻を布教の場とした僧侶たちは、まず、辻のアンマーや婆々（パーパー）計三名を座元（代表者）として、その家に本尊を安置し、三つの講を結成します。そして三講を含む辻の各家へ積極的に訪問し、ジュリたちに説教を行っていきました。『日々琉行之記』には例えば次のようにあります。

四月三十日条

上リノ屋雲登竜（辻の屋号）に行き、（『正信偈』を講じて、）オトトは「必至無量光明土」まで、門口オトトは「龍樹大士出於世」まで達した。

『正信偈』は偈文を句や行ごとに区切って教授していたようです。このほか「白骨の御文」や『往生要集』などもテキストとして用いられた。

また、僧侶の来琉を機に始められたのが、報恩講や彼岸、年末年始の勤行等といった仏事の勤修でした。さらにジュリたちは、次のように、身内の供養を僧侶へ依頼するようになります。

二月二日条

（二月一六日、甚吉（辻の屋号）ノオトトが母の死去に伴って勤行を依頼。）田原が名物（講の座元宅）に行き、甚吉からの依頼があったので読経。

五月十六日条

午後、馬超伊保（辻の屋号）の亀と鶴が「二本八十八一升」（布施か）を供えて、母の命日の勤行を依頼。

以上のように、真宗僧との直接的な関わりが可能になったジュリたちでしたが、わずか一年程で琉球藩庁の厳しい取り締まりを受けるようになります。そのため、僧侶と門徒は疎遠になっていきますが、座元等ジュリたちの中には何とか信仰を保ちしようと、僧侶との面会を試みる者もいました。『琉球上申書類綴込』という史料には、次のように僧侶の説教を聴いて落涙する様子がある。

ります。

（前略） 昨廿四日午前、名物ノ牛（六十二才女第一ノ信者ニ候）・海江田某（大和人）ノ宿ニ参リ、私ヲ呼ニ遣シ候故へ、例ノ通り御消息并ニ木杯等ノ恩賜ヲ演説仕候処、感涙難禁有様（後略）（注2）

しかし、一八七七年一〇月二二日、藩庁による拘引が始まります。そして三六九名が流刑や罰金刑に処せられることとなり、そのうち実に二二〇名以上がジュリでした。以上、紙幅の都合上、触れられた史料はごく一部でしたが、三回の連載を通して、近世琉球のジュリたちの真宗信仰について見ていきました。真宗禁制下、ジュリたち琉球の門徒は、西本願寺あるいは東本願寺派遣の僧侶たちと積極的に交流を図りながら、信仰を維持し、深めていったことがうかがえます。

（注1） 知名定寛・福島栄寿・長谷暢「『史料紹介』福岡県小郡市三沢光明寺蔵 清原競秀「日々琉行之記」」（『神女大史学』第三四号、二〇一七）所収。本稿では現代語訳をして掲載する。○内は筆者注。

（注2） 福島栄寿・知名定寛・川邊雄大・長谷暢「『翻刻』真宗大谷派鹿兒島別院蔵 明治十一年三月整頓 琉球上申書類綴込」（『大谷大学真宗総合研究所紀要』第三七号、二〇二〇）、「一七〇」田原法水差出具状。□は割注。



◎ 沖縄は今！

米兵性的暴行抗議集会

七月四日米兵による複数の性的暴行事件に関して「沖縄を再び戦場にさせない県民の会」は那覇市の県民広場で「人権と命について考える緊急抗議集会」を開き県民ら約六百人が参加した。事件を公表しなかった日本政府や県警、謝罪をしない米軍に怒りの意思を示し「沖縄への不条理を許さない」と抗議し米軍に関するすべての事件・事故を隠蔽することなく公表するように求めた。

【抗議声明】 米兵による女性への暴行事件に抗議します

在沖米軍所属の米兵による16歳未満の少女に対する拉致暴行事件が昨年12月に発生していたことが、今年6月の終わりの報道により明るみに出ました。被害を受けた方の痛みと苦しみが余人には測り難い深いものであることを思うと、事件を防ぐことのできなかった社会の甘さを悔やんでも悔やみきれない思いがいたします。まずはこのことを被害にあわれた方にお詫び申し上げなければなりません。

そして、米軍関係者による性暴力事件が、今年5月とさらに他3件、2023年以降で合わせて5件も沖縄で発生していたことが今になってようやく明らかにされました。事件化されることが氷山の一角であることを考えると戦慄をおぼえると同時に、そのことが担当機関から沖縄県及び地域に暮らす人々に速やかに報告されなかったことに、激しい憤りを感じます。

戦後、米軍との不均衡な関係の中で軍人軍属による犯罪が繰り返されてきました。すべてのいのちが平等に重んじられる「命どう宝」社会の実現を願う沖縄の人々にとって何よりも排除されなければならない性暴力犯罪が、長年不平等を強いられている過重な米軍基地負担により頻発することは、あまりにも理不尽な現実だと言わざるを得ません。

性暴力は、他者を自己の欲求を満たすための道具として扱う、尊厳の蹂躪の最たるものです。くわえて、被害に遭われる方が女性や年少者であるケースが圧倒的に多いことは、男性中心社会が剥きだす牙の恐ろしさの表れでもあり、このような社会構造の継続を許すことは私たちがいただく仏教の教えとは到底相いれないものであります。その意味で、こうした事件が後を絶たないことに、仏教徒としても大きな責任を感じております。

阿弥陀如来の本願には全ての人が平等に救われることが願われています。一部の人の犠牲の上に成り立つ社会ではなく、外見や社会的立場、肌の色や性の違い等による不平等のない世界が願われています。また、自分以外の全てを、自己の欲求を満たすための手段とすることのない世界が願われています。

この本願をよりどころとする仏教徒として、今回の一連の事件と沖縄が置かれている状況に対する強い抗議の意を、全ての日本人及び米国人の前に表明します。そしてこの事件をとおして、自己の欲望を満たすために周りの人を利用していこうとする私たち一人ひとりのあり方が問われているのだということを確認いたします。

最後に、被害に遭われた方の苦しみがいくばくかでも癒されることと、二度とこのような事件が繰り返されないことを念じながら、この事件に抗議の声をあげられている方々と共に歩みたいと思います。

2024年7月11日

真宗大谷派 東本願寺沖縄別院

輪番 長谷 暢

門徒総代 照屋 隆司

この度の事件に対し、沖縄別院より抗議声明を出しました。ホームページにて英訳版も載せています。